

一ツ岩狒化逆門



東方project Fanbook
折葉坂三番地

佐渡から眺める狸合戦



「……そうじゃな、少し昔の話でもしようかの」

化主・聖白蓮の理想の元、人妖共存を掲げる命蓮寺。その離れには3つの人影があつた。離れの主である佐渡の化け狸、二ツ岩ミゾウ、彼女の知己の封獣ぬえ、そして目下、ここで金貸しの修行中であるマヨヒガの化け猫、橙。

夜空に浮かぶ満月の下、ミゾウは懷から取り出した煙管を手を起こした。

その向かいではいと行儀よく答え、橙は浴衣の裾を直して居住まいを正す。尻尾をぴんと立てて熱意を見せるスキマ妖怪の式の式に、ミゾウはそう固くならんでも良いよと苦笑した。

畳の上にあつた煙草盆を引き寄せ、啞えた煙管からゆつくりと煙を吐き出す。元来、煙草は化術を阻害することから狸は紫煙を嫌うものだが——ミゾウは平然と煙草をたしなみ、ことにこの螺細細工の煙管を愛用していた。

「ちようど、昭和の終わりから、平成の始まり頃だったかのう。はるばる四十九里の海を越え三国の山を越え、東京は多摩から一匹の狸が佐渡まで訪ねてきた。丁度、この間のぬえと同じようにな」

離れの庭、樹上に寝そべるぬえの羽がぴくんと動いた。なんだかんだいって、彼女はミゾウによく懐いている。いつも素っ気なく振る舞っているけれど、こうして離れにいる時はいつだってミゾウの様子を気にしているのだった。

「その名を水呑沢の文太。若いのに良くした狸じやったよ。まだ十年も生きておらんというのに、大層立派に人の姿に化けておった。佐渡までの旅費もそうやって人に化けての『あるばいと』で稼いできたというのには驚いたのう」

自分よりも年下と聞いて橙も眼を丸くする。生まれて十年といえ、橙だつてまだ尻尾も二股に分かれていない頃だろう。自分が妖怪になるなんて夢にも思わず、何も知らない一匹の猫として、一日中ご飯とひなたぼつこのことしか考えていなかったはずだ。

「世が世なら、屋島狸大学の特待生となり、金時計を貰ったやもしれん。狸や狐は生来、人を真似、化かすことを得意とするが——それでも大したものじゃ。よほど良い師、良い友、良き出会いに恵まれておつたのじゃろうな」

多摩というところにはそんなに名のある狸がいるのだろうか。橙は藍に習った外の世界の地理を思い出そうとしたが、京都の隣にあるのが奈良なのか鎌倉なのか分からなくなってしまう、こんがらがった頭を抱えてうにやあと鳴く。

そんな橙に目を細め、ミゾウはカンと煙管を鳴らした。

「さて。その文太じゃが、はるばる佐渡にまで何をしに来たのかと言え、儂に助力を求めていることじゃった。この頃、多摩の山々は、人間たちの身勝手な開発事業でさんざんに荒らされておつたんじゃないな。」

人間達は大勢で詰めかけては重機で山を削り、河を曲げ、池を埋め立て、出た土砂を別の山に捨てて非道を繰り返しておると言う。狸達のことなど気にもかけんばかりの横暴じやと、文太はたいそう憤つておつた。多摩の狸たちも、はじめは事を荒立てるのを良しとせず、一時の辛抱と耐えておつたそうじゃが、

いつになっても工事が終わる心配もない。気付けば山が三つも四つも丸裸にされてしまい、とうとう堪忍ならんと一致団結して立ち上がった。多摩の集落の長が集まり、血判状まで回して、人間たちを追いつくべく決起したんじゃない」

外の世界で妖怪達が虐げられているというのは、橙も聞いたことがある。それでも、住まいを根こそぎ壊されてしまうなんて酷いことになっていったのかと橙は驚いた。

それはきつと、マヨヒガが無くなってしまうようなものかもしれない。自分の暮らす住処を追われ、配下の猫達も散り散りにされて、惨めに逃げまどう日々。それがどれほど重大なことなのかを噛み締め、橙はぶるぶると背中を震わせる。

ぶかり、煙を輪にして吐き出し、マミゾウは続ける。

「多摩の狸達は長らく続いた平和の中で、野の獣として生きる事に慣れ、すっかり化術を忘れておった。彼等は今ひとたびの狸の隆盛、化学復興を掲げ、全国各地の名狸たちに助力を請うことを決めた。文太もそうして各地に散った狸の一匹だったわけじゃ」

こうして文太は佐渡の各地を回り、貉総大将・二ツ岩団三郎を訪ね歩きながら、その先々で拳を掲げ熱弁を振るつた。

今こうしている間にも、自分と同じ多摩の同輩たちが全国各地の名狸の元へと馳せ参じている。決起に名を連ねんとするのは狸の本領であるの屋島の禿太三郎、阿波の六代目金長、伊予の八百八狸総帥・隠神刑部だ。

いずれ劣らぬ伝説を持ち、歴史に名を残す日本有数の名狸達である。

愚かしい人間たちに力を示すため、今こそこの国の狸達が総力を結集し、化生の底力ここにありと決意さなければならぬ

時だと、文太は説いて回つたのだ。

「噂はすぐに儂の耳にも届いた。最初にその計画を聞かされた時の儂の感想を正直に言えばのう、『無謀に過ぎる』の一言じゃった。まったく、蠅螂の斧どころではないな。外の世界で人間相手に真つ向立ち向かうなど、今の世にはありえんことじゃよ」

ぶかりと煙を浮かべ、言い切つてしまうマミゾウに、ぬえが不満そうに羽根を鳴らす。

「儂も多摩の狸たちの勢力を詳しく知っておるわけではないが、幼獣古老一切合財を掻き集めても五百から一千がいいところじやろう。その程度の数の田舎狸が力を合わせたところで、人間に適う筈がないんじゃない。悔しい事にな」

文太たちは、あまりにも人間の事を侮りすぎておった。仲間集めに際して、あちこちで自分たちの武勇伝についても語つておつたが、重機の一機や二機を壊したところで、損をするのは下請けの業者じや。開発事業の元締め連中の懐が痛む筈もない。……まあ、現場の連中はそれなりに苦労したんじゃないのうがの」

マミゾウの突き放した物言いに、橙は少し不思議になった。損得はあつても同じ狸なのに、どうしてマミゾウはそんなに多摩の狸のことを悪く言うのだろう、と。

「と、まあ偉そうなことを言つても、儂は実のところ、文太と直接会つたわけではなくての。これは全部後になって伝え聞いたことじや。……なにしろ儂は当時、死んでいる事になっておつたからのう」

マミゾウは長く煙を吐いてから、カンと煙管を鳴らし、火を落とす。

「前にも言うたが、儂は長いこと外の世界で人間達に混じつて

暮らしてきた。人間の商売というのはこれでなかなか面白くての。時に儂らの思いもよらぬ事を考え出して、とんでもないことをやり遂げる。儂はそういう連中を見るのが好きでなあ。そこいらの妖怪よりも、人間達とは馴染んできたつもりじやよ。折も折、戦争に負けてからこの国もあれこれと変わつてのう。狸と人間と、二足の草鞋がいろいろと面倒になった時分じやつた。そこでな、禅達たちとちよいと相談して、狸の身分を捨てて人間になつておつたのよ。表向きは獵師に撃たれたということにしてな。

……なに、団三郎と言えば浮世絵の通り美丈夫じやつたからな。この姿は案外誰も気づかんかったよ」

からからと笑うマミゾウに、ぬえが意外そうな声を上げる。彼女にしてみれば二ツ岩団三郎はずつと昔から今と変わらぬ、娘の姿なのだろう。

「そんな具合だから、結局、文太は儂を見つけることはできなかった。佐渡には他にも名のある貉が沢山居るが、そやつらにも文太と会うことを禁じた。勝ち目のない戦に挑む真似はせんように」と言い含めてのう」

空に浮かぶまんまるの月を見上げて、マミゾウはゆつくりと伸びを一つ。橙もつられて欠伸をした。

「それにのう、儂は、刑部殿も、太三郎殿も金長殿も、動かんだろうと決めつけておつたんじや。文太たちが助けを求めた相手は、誰も彼も大物すぎた。いかに一大事と言えども、多摩の田舎狸が呼びつけるには釣り合わんだろうとな。」

特に、屋島の太三郎殿は日露戦争の折に大陸に勇んで出征して、御子息と一緒に若い狸を沢山失つておつた。ロシヤの寒さに苦しんでほうほうの体で逃げ帰つて来た御仁が、まさかもう

一度人間と事を構える気になるとは思いもせなんだ。……じやが、な」

佐渡の二ツ岩は、肩をゆすつてふうと大きく息を吐く。「……信じられんことにな、四国の名狸たちは、示し合はせてように肩を並べて多摩に向かつたんじや。それを聞かされて、儂は正直、耳を疑つた」

それはまさに、狸社会で——否、妖怪の世においても前代未聞の椿事であつたとマミゾウは語る。

「いやはや、多摩の山に何かとんでもないものでも眠つておるのかという与太話を本気で疑つたくらいじや。それほど大層な事だつたんじやよ。流石にそうなると、儂も黙つて見ておる訳にはいかん。すぐに多摩に使いを出して探りを入れさせた。」

じやがな、刑部殿も太三郎殿も金長殿も、血迷つたわけでも気が違つたわけでもなかった。本気で力を合わせ、人間達に一泡吹かせてやるつもりじやつた。それを知つて愕然としたのう。まさか皆揃つて毫碌して、勝てる戦かどうかも分からんようになつてしまつたのかと思つたくらいじや。

とは言え、いくら悔いてももう後の祭りじや。儂は佐渡から動けんかった。どうにか止められぬものかと、芝右衛門殿や證誠寺の若衆にも声をかけたが……どちら也多摩からは少しばかり遠すぎてな、とても間に合わんかった。

三名狸の指導のもと、多摩の狸達はいきなり奮起したが、あれこれと巡らせた策も空しく、多摩の森は無惨に荒らされ、抵抗運動の本拠だつた万福寺も陥落した。挙句、刑部狸はこのご時世に百鬼夜行なんぞという大化術に挑んでぼっくり逝つてしまった。老いらくの残りわずかな妖力気力、命まで削つて最後の化術をしてのけたツケじやな。……八百八狸の総帥が後釜も

決めずに死んでもうたから、伊予は後になつて相当に揉めたそうじゃの。あわや阿波の狸合戦再びという剣呑さだったそうじゃ」

苦笑いとともに、マミゾウは湯飲みを煽った。月を仰ぎ、目に染みるのう、とぼそりと言。

「そしてな。狸達の一大反攻作戦は、結局人間どもに一泡吹かすどころか、何の成果もあげられぬまま、半年もせずに忘れられおった。文太を含む多摩の狸たちは、里を諦め、人間達に混じつて暮らす事を選んだそうじゃ。

……儂の予想は、外れておらんかったよ」

眼鏡をそつと抑え、佐渡の化け狸は静かに呟く。月明かりに照らされて、橙からはマミゾウの表情は窺えないが——きつと泣いているのだらうと、スキマ妖怪の式の式は確信する。

「本邦八百八狸の首領達も、やはり老いておったのかもしれない。……いや、違ふの。あやつらが、本当に多摩の戦に勝ち目があると思い込んでおったとは、どうにも考えたくないだけかもしれないのう。

あるいは刑部どのも……今の時代に生き残る狸達の最後の晴れ舞台に、挑みたかったのかもしれない——儂はそう考えておるよ。そう思うこと自体が、儂の老いじやらうと……船場山の狸公方には笑われたがの」

ふうと吐息。

長い長い年月、人の世界に混じつて生きてきた佐渡の狸は、静かに話を締めくくる。

「本当に、どいつもこいつも馬鹿な奴ばかりじゃな」

そう言つて、マミゾウは大きく煙を吐いて黙り込んでしまう。樹上で葉何か言葉をかけるべきなのだろうか、ぬえは落ち着

かない様子である。
橙もまたその隣で、神妙な顔をして——やはり同じように黙つて月を見上げていた。

(丁)

(Pixivより改稿して再録。id=2457292)

二〃岩貉化逆門

▼ 1

佐渡の貉総大将、二ツ岩団三郎と言えは、お伊勢へ七度、熊野は三度と歌にまでされるほどの旅好きである。

鎌倉の終わりに佐渡に本拠を移してしばらくの間こそ、越国総鎮守一宮を牛耳る宝徳山稻荷との紛争に備えて越佐の勢力基盤の構築に忙しくしていたが——東光寺の禅達や重屋の源助を始めとした佐渡東西の名狸らを従えて以来は余裕もでき、暇を見ては相川の岩窟を空にすることが多くなった。

ふらりふらりと各地を旅する二ツ岩狸の姿はときに海を超え、異邦の地へと向かうこともあった。巧みに人に化け、各地を旅する彼女の姿はあちこちの記録に残されている。

御一新以来は生来の好奇心も手伝って、魔都上海や戦乱に燦る大陸、果てはロシアの凍土を踏み、極東の商人としてかの女帝エカテリーナ宮殿の『琥珀の間』に招かれたことまである。

それは、二ツ岩マミゾウの活動の主体が幻想郷に移ってからもう変わらない。

旧友にして寵愛深き京都の大妖怪・封獣ぬえに請われ、佐渡の護りを東光寺の禅達狸に任せて一年半。忘れられた妖怪達の楽園に辿り着いた古狸は、幻想郷じゅうの化け狸達を掌握し、人里はおろか地底や天界、冥界へも顔を出し、広い人脈を築くに至る。

不倶戴天の相手たる九尾狐——神隠しの主犯・八雲紫の腹心たる八雲藍という好敵手とも相まみえ、新天地の日々を忙しく

過ごしていた。そんなマミゾウであるが——幻想郷の各地を巻き込んだ神、仏、道の宗教戦争が一段落したある日、彼女はまるで思い出したかのように、命蓮寺の離れに四、五日ばかり留守にするとの書き置きを残して、ふらりと姿を消した。

寺の者たちが化け狸の首魁の不在に気付いた時には——マミゾウの姿は既に大結界の外、彼等の呼ぶところの『外の世界』の、京都にあった。

9月も半ばだと言うのに喧しく、蟬が鳴く京都。千年を超える歴史を数える古都に、場違いなばかりに聳える黒耀の宮殿、JR京都駅。天へと登らなばかりの大階段を見上げ、佐渡の化け狸は新幹線の指定券を弄びながら額を拭う。

「やれやれ、異常気象も年々酷くなつとる気がするのう。経済成長も結構じゃが、森がのうなるのはどうにも息苦しくてならんぞい」

人に化けたマミゾウの装いは、ジーンズに半袖のシャツ、市松模様タイを締めて下縁の丸眼鏡といった簡素なもの。この国で一番目立たないのはおふいすでれい一の格好なのだが、遠出の長旅には向かないし、背広はどうにも背中が窮屈で落ち着かないのだ。

「まったく、何年過ぎても変わらんなあ、ここは」

京都を訪れるのは何年ぶりになるだろうか。指折り数えて途中で諦め、旅行客でこった返す構内を見て吐息する。

マミゾウは旧友である封獣ぬえの力を借りて結果を抜けてきた。かつての平安京での夜を騒がせた正体不明の妖怪・鶴は、この地と強い因果で結ばれている。それをただ乗りのような形で利用したのだ。もっとも、ぬえ本人に許可を得たわけではなく、化術を用いて結果を騙したようなものであるため、いろいろ

ろと面倒を呼ぶ方法であつたのは確かであろう。

「……あとで煩く言われるかも知れん。う。ぬえにも土産を用意せんといかん」

ぼやきながら、マミゾウは愛用の金時計をばちりと閉じてポケットに戻す。

「さあーて、どう時間を潰したもんか」

勢いこんで出かけてきたはいいものの、今日が秋の連休である事などすっかり失念していたのである。新幹線の指定席は午後までぎっしり埋まっており、自由席は乗車率150%。すぐの出発は諦めざるを得なかった。

明治の初めに現世と隔離された幻想郷では、暦は外界とずれており、祝祭日なども異なるのである。他の電車で向かうという手もあった事に気付いたのは、切符を買ってしまったあとだった。

「――ま、久々の京都じゃ、のんびり行こうかの」

どのみち、今更急ぐような旅ではないのだ。観光がてらに今の『みやこ』を見てやろうと決め、マミゾウは行くあてもなく歩き出す。

旅行客の賑わいに混じって数十年ぶりの街並みを眺めるうちに、いつしか四条あたりまでぶらぶらと歩いてしまった。息苦しいほどに寺社仏閣のひしめく古都は相変わらずだ。かつてのような攻撃的な気配は薄れたものの、帝の御所を守る靈威はいささかも衰えていない。

日も高くなり、空腹を覚え始めたところで新京極の入り口のとこに洋食屋の看板を見つけ、マミゾウはこれ幸いとそこに腰を落ち着けることにした。

「ふむ」

地下への階段を降りた先、歴史を感じさせる落ち着いた雰囲気の内には、学生らしき姿がちらほらと見えた。メニューの一番上にあつたオムライスを注文し、遅い昼食とする。

どれ一服、ともぞもどと煙草を探しかけたマミゾウだが、壁に禁煙のマークを見つけて懐を探る手を止めた。

「……ありや」

いかにも喫茶店然とした店内にも、分煙の波はやってきているようだった。まったく今の世は好きなように煙草も吸えなくなつて久しい。さみしい口にアイステイのストローを咥え、ふつと息を吐く。

「……どこもかしこもこんな有様で、窮屈にならんのかのお」手持無沙汰になり、耳を澄ませば隣の席で少女達が明日からの旅行の日程についてあれこれと話し込んでいる。後ろでは夏季休暇明けの課題に取り組む学生の姿。

「……む」

連れ立って店を出ていく三人連れの学生達に、マミゾウは眉をびくりと動かした。よく化けているが間違いない、あれは狐だ。まず間違ひなく伏見稲荷の眷族だろう。

（監視――では、無いようじゃな）

まさか尾行でもされていたかと一瞬冷や汗をかいたが、どうやら杞憂だったらしい。マミゾウに気付かないまま出てゆく狐たちを見送って、安堵と共に机に頬杖を突き、マミゾウは洋食店の奥にある神棚を見上げる。

いくつかの例外を除いて、日本各地の化生はいまや伏見の正一位稲荷を筆頭にした稲荷狐たちの統率下にあると言っても過言ではない。この京都だけを見てもそれは明らかで、独立の信仰を保っている妖怪など、北は鞍馬山の天狗魔王尊くらしいのも

のだ。

長い人間の時代に、生き残った化生は狐である。

化術の技に関しては劣るところなどないと思自負しているものの、その点は認めざるを得なかった。彼等は自分以外の信仰の力を取り込む事に躊躇がない。八雲の式の九尾がいい例だろう。それは本来の自分を失いかねないことでもあり、妖怪には命の危険すらある行為なのだが——狐たちは政争渦巻く混沌の京都で、ダキニ信仰や豊饒神への信仰を巧みに取り込み、陰陽領や院にも食いこんで、廃仏毀釈や二度の遷都を乗り越えて生き延びてきたのである。

「……忌々しい話じゃが、人間に混じるのは奴らの方が長けていたと言う事じゃろうなあ」

京都でも十数年前までは、名門の京狸達が下鴨神社は糺の森『偽右衛門』下鴨総一郎狸のもとに確固たる勢力を築いていたのだが——総一郎が悪辣な人間どもの卑劣な畏れによって狸鍋にされて以来、すっかりその名は地に落ちていく。

叡山電車や鞍馬の山にまで化け、かの如意ヶ嶽薬師坊をして京都狸界の名門と言わしめた総一郎狸亡き後、京都の狸の長老たちはすっかり耄碌し、妖怪を食い物にする人間達の跋扈を許している。新たに偽右衛門を襲名した平太郎狸に至ってはすでに京都の一門をまとめる意欲を失い、早々と隠居して南の国で余生を送る夢を語る始末だという。

「……んむ。そう言えば、総一郎殿の御息はまだ」健在じゃったかな」

総一郎には妻との間に四人の息子がいた。彼らもまたそれぞれに癖者ぞろいと聞くが、いまでもこの京都で人に混じりなお遅しくも楽しく生きていくらしい。

一度会ってみたいものじやないと呟いて、マミゾウは運ばれてきたタルタルソースと卵のたっぷり乗ったオムライスを堪能するのだった。



夕方の新幹線で京都を発ち、マミゾウが岡山に入ったのは夜になってからだ。予約を入れておいた駅前のホテルで一泊して、翌朝には早々に宿を引き払う予定である。

「余裕があれば、もうちょっと見て回りたいかったのう」

駅直結のホテルは価格の割になかなか立派であり、部屋の居心地は上々であった。眠るだけの宿になってしまったことになささか勿体なさを覚つつも、旅程を考えると夜街に繰り出す気分にもなれず、早々にベッドに潜り込む。

かくして翌朝。朝6時前にホテルを引き払い、マミゾウは駅へと向かう。ここから快速マリナーで瀬戸大橋を渡るのだ。古くは船を仕立てて半日がかりで渡った瀬戸の海峡が、いまや掛けられた大橋を渡って文字通りの朝飯前である。人間社会の進歩を噛み締めつつ、マミゾウは1時間あまりの旅を経て四国・高松へと降り立った。

久しぶりに踏む、狸の本領——感慨に耽る暇もなく、マミゾウは改札横の立ち食いうどん屋から漂う美味そうな匂いに、ふらふらとへと引き寄せられていく。

「ちと腹ごしらえでもしておくか」

「いらっしやい！」

威勢の良い主人が一人で切り盛りしているらしい店内には、そこかしこに観光宣伝のポスターが貼つてあつた。讃岐名物と言へば確かに定番の讃岐うどんだが、なんでも愛媛は最近、うどん県を自称して町興しに努めているという。

「……観光誘致も大変じゃなあ」

券売機で勝った食券を並べ、待つことしばし。

ゆで上げたばかりのうどんを冷水で締め、井におろし大根と薬味を少々。讃岐のうどんの腰の強さ引き立たせる濃い汁をかけてずるずると啜るものだった。駅舎の立ち食いという立地ゆえに大した期待もしていなかったが、出てきたものは思いの外本格的な盛り付けである。

「……ふむ」

手を合わせ、箸を割つてうどんを口へと運ぶ。一口でマミゾウのほうと肩が跳ねあがつた。

もともと気が向いた程度で選んだ店だったのだが、それなりに食通であると自負しているマミゾウの舌をしても、この店は十分以上に合格と言えるものであつた。

「むぐ、んぐ。……ごちそうさん」

軽く腹ごしらえのつもりが、ぺろりと二人前を平らげてしまったマミゾウに、人懐こそうな主人が器を片付けながら聞いている。

「毎度ありい。お嬢さん、どちらに？ 観光かい？」

「ん……、ああ。ちいと、昔の友人に会いになあ」

そう答えて主人に札を述べ、マミゾウは暖簾を潜る。ちようど改札を出たところで、マミゾウの元に一羽の鳥が飛んできた。指に留まると同時に、鳥はどろんと一枚の葉に姿を変えた。

「ふむ。間に合ったかのう」

そこに記された文面に目を通し、駅前のバスステーションへと向かう。

四国八十八番札所、その第八十四。南面山は千住院・屋島寺へは、高松駅から直通の観光バスで30分ばかり。海に面してくねる坂道を登った先でバスを降りれば、そこはかつての源平の合戦の古戦場として客を呼ぶ観光地であつた。

そここに売店や土産物屋が軒を連ね、ポニーテールの少女がかわらけ投げに興じ、観光の旗を掲げたガイドに先導されてツアー客がぞろぞろと歩いてゆく。

サヌカイトの風琴が涼やかな音を奏でる隣では、野外に大きな演劇場が設けられて、義経と平家の合戦を模した演劇が客を集めていた。演目はまさにクライマックス、源氏の忠臣佐藤継信が義経の盾となり、王城一の精兵・平教経に討たれる場面である。

舞台の上で事切れた継信を抱きかかえ、涙する義経に、観客達から拍手が飛んでいた。

「……実物よりだいぶイケメンじゃのう」

判官鼻肩に始まったことではないが、屋島の合戦から八百と余年。武勲と誇りを駆けて戦った源平武者の勇猛ぶりは、なお人々を惹き付けて止まないということだろうか。

島をぐるりと回る観光路に沿って、休業中のホテルの傍を抜け、水族館を右手に一周。遍路傘の行き来する巡礼路の脇へ。作法通りの順路をたどり、マミゾウは四国札所のすぐ隣に並ぶ社殿へと辿り着いた。

「お久しぶりです、太三郎殿」

鳥居から社殿に一礼し、奉納品である狸の信楽焼が山と積ま

れた碑を回り込めば、そこには小柄な老狸の姿があった。マミゾウは礼を失さぬよう耳と尻尾を出し、深く頭を下げる。

「ほっほっほ。よう来てくれた」

一見して好々爺然とした佇まいの老人が、ふさふさの眉毛を跳ねあげ、大きく手を広げてマミゾウを出迎える。ただでさえ小柄な身体は、まるまった背のせいでもるで子供のよう。つるりと輝く頭は通り名の通り一本も髪の毛がなく、代わりに地面に引きずるほど長い白髭をたくわえている。立派な袈裟を纏う彼の後ろには、まだ若い狸達がやはり僧形となつて控えていた。

この老狸こそ、四国屋島は葦山大明神に祀られた、屋島の禿こと太三郎狸であつた。

遡ること一千と二百年前よりこの地を治め、讃岐の狸達を従えて、淡路の芝右衛門、マミゾウこと佐渡の二ツ岩団三郎とともに、日本三名狸に数えられる大妖である。その神徳は四国から海を越えて大陸まで鳴り響き、いまでは弘法大師の隣に妻子共々に祀られているのであつた。

「これは、太三郎殿直々のお出迎えとは」

「なに、これくらいせんとお主には引き合わんじやろう。遠路はるばる御苦労さまじやな」

ふさふさの眉毛を動かし、太三郎はじろじろとマミゾウの姿を眺め、ひやつひやつと愉快そうに笑う。

「いやいや、相変わらず可愛らしい格好じやのう、眼福眼福。佐渡のお嬢ちゃんはお変わらんのう」

「……若造扱いは止して下さいらんか」

まるで子供のように容姿を褒められ、マミゾウはこそばゆい思いで訂正する。確かに太三郎はマミゾウよりも年嵩だが、その差は精々百かそこらである。おたがい千年以上を生きた古老

であり、いまさらどちらが年長などと張り合う意味もないはずだった。

「ひやつひやつひや。なーにを言うておるか。そのような見てくれを繕つておるうちは、若造扱いくらいは受け入れておかんといかんじやろう。ん？」

「……かないませんのう」

茶目つ気たつぷりにばかりとウインクをしてみせる太三郎に、マミゾウは後ろ頭をかくばかりだ。

屋島の頭領は、マミゾウがようやく二本の足で立ち、覚束ない手つきで人に化ける術を覚えた頃にはもうすっかり年寄り狸であつたが、それから千年以上もの歳月をずっと老狸として矍鑠と生き抜いてきた知己である。

平安時代の末に朝廷と貴族による統治が凋落を迎え、源氏と平家が武力を持つてこの国を巡つて争つていた時代、マミゾウと太三郎は揃つて京都にいた。四国に本拠を構える八百八狸の総帥、隠神刑部の名代としてである。

当時、既に人間の力を侮れぬものと認識し、その行く末を注視していた刑部狸は、多くの化け狸達を人間社会に潜入させていた。貴族、武士、帝、院、混迷する京都の中、対立する勢力のいずれにも己の名代を潜り込ませ、その動向を探り、時流の把握に努めていたのだ。

太三郎は、平家の棟梁である平清盛の嫡男、平重盛に恩を得てその庇護下に。そしてマミゾウは、佐渡の商人として摂津源氏の棟梁たる源三位頼政入道の元にいた。ふたりは保元・平治の乱に始まり、壇ノ浦で平家が滅亡するまでの戦乱を共に戦い、何度となく戦場でまみえたのである。

その後、故あつてマミゾウは刑部狸に暇を願い出、佐渡へと

落ち伸びることになった。太三郎とはそれ以来、ほんの数度しか顔を合わせていない。

「しかし、懐かしい限りじゃなあ。最後に会ったのは確か、天保の……阿波の合戦の折かの？」

「そうなりますか。あの前に、刑部殿の松山騒動で用心棒に呼ばれておりますが、儼は後詰めで大仕掛けには関わっていませんでしたからのう」

「おう、そうじゃったそうじゃった」

ぽん、と手を打ち、太三郎は面白そうにもじやもじやの眉を跳ねあげる。

「太三郎殿も、ご健勝のようですねによりです」

「なになに、ますますおいぼれてばかりじゃよ。なお若々しくいられるお前さんが羨ましいぞい」

細い目をますます細くして微笑む太三郎。

「多摩の事、長らく、お詫びをしなければと思っております」

「ひやつひやつひや。過ぎたことを言うても始まんよ。義理がたいのう、お嬢ちゃん」

多摩ぼんぼこ騒動。そう呼ばれる一連の事件が起きたのは、いまから20年ほど昔のことだ。

折からの高度経済成長、それに続くバブル経済によって始まったニュータウン開発によって、東京は多摩の丘陵地帯の開拓が進んでいた。これにより住処を追われた狸達は古寺・万福寺に結集し、人間を撃退せんと一大反攻作戦を掲げて、全国各地の名狸達に使いを走らせて助力を求めたのだった。

化け狸の本拠四国からは、讃岐屋島の太三郎のほか、伊予の隠神刑部、阿波の六代目金長らが連れ立ってこれに応じ、多摩まで出向いてこの騒動に加勢した。

彼らは長らくの平穏ですっかり野の獣となっていた若い狸達を鍛え直して、かの地に狸の復権を試みたのである。

しかし、^{化け狸}化学の復興こそ成功したものの、狸達の奔走虚しくあの手この手の作戦はいずれも人間達には通じなかった。

闇を恐れることのなくなった人間達は山野を切り崩し、沢河をコンクリートで固めて、無慈悲に狸達を駆逐していった。

相次ぐ犠牲に士気を削がれ、同志が次々脱落する中、三名狸と残る総力を結集し、最後の逆転を駆けて臨んだ大化術、妖怪百鬼夜行へと望みを託す。しかし、その切り札すらも途中で失敗、その中で刑部狸が命を落とす結果となった。

化け狸の力が通じぬという現実を目の当たりにして太三郎も突然自失となり、しばらくは多摩の山中でかつての親友の菩提を弔い、日がな一日念仏三昧で過ごすまでに耄碌してしまっただけという。

抵抗騒動も立ち消えとなり、多摩の狸達が散り散りとなる中で、太三郎は後を追ってきた侍従に付き添われてどうにか屋島に戻り、十年ばかりを静養を余儀なくされたのであった。

多摩の騒動は、いまも狸社会において苦い思い出と共に語られている。マミゾウも太三郎も、それは同じだった。

「こうして会って、それが開けただけでも十分じゃよ。刑部もきつとそう思っておるじゃろう」

頭を下げるマミゾウに、太三郎は数珠を握る手をそとと合わせ、念仏を唱えた。元々信心深かった太三郎が、仏道に深く帰依したのはあの騒動以来だという。

「なに、おぬしもおぬしなりの考えがあつての事じゃろう。ささ、頭をあげておくれ。辛気臭い話はこれまでじゃよ。今日は一席設けておる。存分に呑んでいっておくれ」

太三郎がぼんと腹鼓を叩くと、そこかしこに控えていた狸達が一斉に飛び出してくる。酒に料理を抱え、十畳敷きの赤絨毯を広げてまたたく間に宴席の会場と変わった叢山大明神の裏手に、乾杯の声が響いた。



賑やかに始まった宴席の中、高松名物、一鶴の骨付若鳥を肴に飲めや歌えとはしやぐ狸達の中、マミゾウはどうにも居心地の悪さを隠せなかった。

遍路傘の絶えないお大師様の傍という立地もさることながら、宴に同席する見慣れぬ顔のせいである。

その原因——宴席の斜め向かいに座る屋島の三稲荷、七九朗狐、平雄狐、朝日狐の三名もまた、マミゾウのほうを遠慮がちに伺っていた。

「……………」

太三郎を祀る叢山大明神のすぐ脇、ずらり並んだ赤鳥居の奥には、彼ら三柱の狐を祀る稲荷社が控えている。およそ佐渡では有り得ない光景だが、これは太三郎の意向であった。仏道に帰依した太三郎は、狸の長年の宿敵たる狐たちにも慈悲深く、屋島の化け狐たちと同輩の契りを結び、所領を分け与えて共に境内を守ろうと呼びかけているのだ。

伏見稲荷の加護のもと正一位を預かる七九朗は、神格だけならマミゾウや太三郎と同格。理屈だけなら、ここ屋島は狐と狸が並び立って祀られているに等しい。

これは、大の狐嫌いのマミゾウとしては容易に受け入れがたいことであった。

「そう嫌な顔をせんでおくれ、佐渡の。呉越同舟というじやろ。妖怪にはまこと生きにくい世の中になった。彼らも同じ化生仲間じゃ、仲ようせんとな」

「……はあ」

太三郎の手前、生返事こそ返したものの、視界の端で内輪になつて何事か囁き合う狐たちの姿が気になつて仕方がない。彼らもマミゾウを警戒しているのか、形だけの宴席の挨拶を述べてきた後はずつとこの調子なのだ。

（儼とした事が忘れとつた。これがあるから太三郎殿とは疎遠になつておつたんじやよなあ……）

無然と缶ビールを傾けるマミゾウ。

四国にすっかり足が遠のいていたのも、元をたどればこれが理由であつたのを思い出しつつ、口元に泡髭を作つて深く吐息する。

とは言え一応は格上の先輩相手、しかもマミゾウは招かれた客の立場だ。ここで我を通す訳にもいかず、曖昧な笑みで応じる他なかつたのである。

しかしいくら口に出さずにしても不機嫌な気配は駄々漏れであり、宴席の隅で固まっている七九朗達も明らかにマミゾウからは距離を置いていた。佐渡の二ツ岩狸が、越佐で対立した狐たちにどんな苛烈な処断を下したかは、いまでも畏れをもって伝わっているらしい。

宴席に漂う微妙に白けた気配を紛らわせようと、マミゾウは次々に杯を重ねる。酔つてしまえば少しは気にならなくなるだろうという目算であるが、そんな理由で重ねる盃が美味いはず

もなく、いまいち気の乗らないぼやけた酔いだけが溜まってゆくばかり。せつかくの酒も若鳥の肉も味の分からぬままだ。

「さて、頃合いかの」

そんな心の内を知ってか知らずか、赤ら顔となつた太三郎は身を翻し、社殿の上へと飛び上がった。

「久々に見られますよ、太三郎様の十八番だ」

若い狸が興奮に立ち上がる。マミゾウが顔を上げれば太三郎が大きく息を吸い込み、どんと腹鼓を打ち鳴らしたところだった。

とたん、あたりの風景がぼやけ、白い霧に包まれるように消えてゆく。ざわりと脚を撫でる感触に見下ろせば、どこからか溢れ出した波がマミゾウの足を洗っていた。

驚く若い狸や狐たちをよそに、マミゾウは眼鏡を押し上げて鳥の化け式を呼び出し、酒につまみを空中へ避難させた。ひょいと宙空に腰かけて見下ろせば、あたりは美しい松の生える浜辺へと化けており、白い砂浜には綾目の波が打ち寄せる。

ざん、と揺れる海の上、一艘の小舟が波間にあつた。舟にはひとさしの扇が立てられ、美しい姫君がその隣で袖を振り招く。この難題に挑む主役はすぐに現れた。いなく馬の声に一同が視線を巡らせれば、向こう岸の松の間より、一頭の馬に跨つた美しい若武者が浜辺を駆けてくる。

いつの間にか海の上には赤旗を掲げた平家の船が何百艘も並び、浜辺には白旗を掲げた源氏の武者たちが数千騎と詰め掛けて、扇と若者の一挙一動を見守っている。

太三郎狸、十八番の化け術、屋島の那須^{なすのよいち}とだ。

若者は長い黒髪をなびかせて、馬上の上、見事な大弓をぎりりと引き絞り、南無八幡の声とともに一矢を放った。空を裂く

鎧が見事、狙いたがわずに扇の元金を打ち抜く。

ばあつと空を舞う扇は、海鳥の羽ばたきと羽根の中に消えてゆく。絵巻の中に入り込んでしまったかのような美しさに、狸達は声も無く見惚れていた。

「お見事」

マミゾウが拍手を打ち鳴らすと、我に返つた狸と狐が一斉に歓声を上げる。

空を舞う扇に皆が見とれている間に——景色はまたも姿を変える。皆はいつの間にか一艘の小舟に乗せられ、波の狭間にあつた。

周囲には何艘もの船が重なり、関の声が次々に響く。紅白の旗が入り乱れる壇ノ浦に、一騎打ちの名乗りを張り上げ、源平武者たちが舟の上でがつきと組み合う。

ばらばらと降り注ぐ弓矢の中、舟にぱつと火の手が上がった。黒煙を割^わいて右手より現れるのは王城一の強弓、平家きつての剛^{たけな}の者、平教経^{へいけいきやう}だ。

一門の者たちが次々打ち取られる劣勢の中、彼は矢を打ちつくした弓を投げ捨て、単身源氏の舟へ乗りこんできたのだ。右手に太太刀、左手に薙刀を抱えて暴れ回る教経に、源氏の武者たちが次々打ち倒されてゆく。

教経はなおも小舟を走り、奥に陣取る源氏の大將へと迫る。

気合一閃、振るわれる太太刀は、確かに源氏の大將を屠ったかに見えたが——彼は身も軽く宙へと飛びあがり、波間に揺れる小船を次から次へと飛び回る。

まるで天狗のような身のこなしの若者こそ、源氏の御曹司、源九朗義経。

「おう、義経の八艘跳びか。……これは初めて見るのう」

若い狸達の喝采を背に受け、太三郎の大化術はさらに続く。吉野山の狐忠信（これは七九朗狐の後ろ盾である伏見稲荷への配慮だろう）、弁慶の勧進帖、静御前の白拍子舞と千変万化に源平の名場面を彩り——最後にはどろんとひととき大きな煙と共に、満開の千本桜を散らした。

常世の春に若者たちは感極まり、狐も狸も揃って声を上げる。一気に暖まった場の中、赤ら顔になった太三郎が一礼すると、万雷の拍手が鳴り響いた。

千鳥足の太三郎はよいよいと社の屋根を飛び降り、ちよこんとマミゾウの隣に腰を下ろして大きく額の汗をぬぐう。マミゾウが徳利を出せば、太三郎狸はそれを受け、ぐいと杯を傾けて飲み干した。

「はあーあ、やれやれ、年甲斐もなく張り切り過ぎたわい」

「お見事でしたぞ」

「世辞は止しておくれ。佐渡の。十番どころか五番勝負も保たなかった。あれくらいでへばつてしまうとは、我ながら情けない。歳はとりたくないもんじゃな」

最後の千本桜は演目の本来の締めではなく、息が上がり続かなくなった化術に無理くりにおチをつけたということであるらしい。しかし、マミゾウは心からの賛辞を太三郎に送っていた。

「何を仰るやら。太三郎殿が五番なら、儼なんぞ三番も持たんでしよう」

「ひやつひやつひや」

太三郎の得意とする化術は、空間自体に作用する大がかりなものだ。陸を海に、砂浜を空に、里を森へと丸ごと作り換え、まるで舞台のように多くの演者を自在に動かす。屋島の浜に波打つ海、扇を掲げた小舟と姫君、それを馬上より狙い撃つ那須

与一宗孝、妙技に喝采を送る源平の武者——そういったものをたつた一人で行う化術の妙は、化け狸の本流である四国で伝統の術の妙を磨き続けたからこそ絶技であった。

かの三名狸、淡路洲本の芝右衛門が大坂で化け比べをした折大名行列に化けた芝右衛門が、化術の大家と喝采を受けたように——化術とは本来、ひとつのものを別のひとつに化かす、一対一の対応が原則である。十枚の落ち葉を十枚の一万円札へ化かすことは簡単でも、一個しかないドングリを十枚の百円玉へ化かすことは非常に困難を伴うのだ。

百を超える変化を同時に可能にするマミゾウの術もその例に漏れず、鳥を魚にするような、変化の大本となる核の本来の性質をまでも変化させることは難しい。マミゾウは大がかりな化術を使わねばならない時には、懐に飼っている蟹が吐き出す蟹気楼の助けを借りていた。それを単身で可能とする太三郎の技の冴えは、いったいどれほどであるだろうか。

いずれにせよ、余興と呼ぶにはあまりにも鮮やかな千変万化の大化術。マミゾウと狐たちの不和を見抜いての、見事な太三郎の助け舟であった。

「ところで佐渡の、はるばるご来訪という事は、芝右衛門殿や金長殿にはもう会ってきたのかのう？」

「……生憎と、岡山から入ってきましたものでな」

痛いところを突かれたと、マミゾウは一度口ごもる。京都から四国へ渡るなら淡路を超えて徳島に入るのが近道である。マミゾウにはそれを敢えて避けてきた理由があった。

阿波の狸は佐渡や屋島とはまた違った成り立ちをしており、血筋に寄らず実力をもって代替わりすることで知られている。現在の阿波の狸の頭領、金長大明神は初代より数えて七代目、

これを預かるのは玉三郎という狸で、余所から四国に移り住んだ変わり種である。

この玉三郎も件の多摩騒動の関係者であった。多摩は鬼ヶ森から六代目を頼つてはるばる阿波に辿り着いたのはいいが、まだ歳若く化け術も未熟であった玉三郎は、長旅の疲れに倒れ、半年近くの間、病に伏せることになった。そんな折に看病をしてくれた六代目金長の一人娘、小春と懇ろになつて、二男一女をもうけてしまったのである。

紆余曲折を経て六代目もその度量を認め、玉三郎が七代目金島大明神を襲名したのはそれから間もなくのことだった。

「……儂が世話になりましたのは先々代の時分になりますな。先代とはお若い頃に数度お会いしたばかりで。あちらも面子商売、余所者が慣れ慣れしく窺うのは少々都合がよろしくないと思ひましてなあ」

そう、阿波の狸と言えば血の多い事で知られる任侠社会、筋金入りのやくざ狸である。過去に四度も大きな合戦を起こし、ここ屋島や松山の狸達とも出入りの争いをしてまで、血で血を洗う抗争を続けてきた。その為か太三郎や刑部狸のように、長じて何百年と君臨することを敢えて避け、代替わりをすること組織を保っているのだ。また、抗争の中で命を落とした者も少なくない。初代、二代目、四代目の金長狸は、いずれもいくさ場での矢傷や鉄砲傷によって命を落としたと伝えられる。

しかし時代が下り、御一新で侍が鬚を落とし、文明開化の波が電灯を持ち込んで夜を照らし、人間の社会が変革をするに至り、彼等の在り方もまた変革を余儀なくされた。先代の六代目金長はそれまでの武闘派から一変、温和路線をとり、阿波の狸にしばしの調和をもたらした。が、七代目に代替わりして以降、

まだ歳若い金長狸を侮つて古老たちが腰を上げ、あちこちで小競り合いが始まっているのだと言う。

「ひやっひやっひや。七代目が色男なのも宜しくなからうなあ。化術の腕は若くして大したものじゃが、見た目からして優男すぎてのう、どうにも芯が細いし胆力も迫りも足りぬ。六代目が見込んだ若者じゃ、もう三十年もすれば立派にならうが、向かう傷だらけの任侠の世に甘く見られるのはしかたあるまい」

太三郎も玉三郎とは面識があるらしく、割と辛辣な評を向ける。まったく、三十やそらの若狸がこの怪物たちと渡り合っているだけでも驚嘆に値するのだが。

「六代目殿も引退されたとはいえ健勝じゃし、確か阿波の合戦で佐渡に渡つていった仲間もおろう。佐渡の嬢ちゃんもいろいろと聞きたいことはあるのじゃないかね」

「……でしようなあ」

色々と耳の痛い話だ。マミゾウはこつそりと耳を伏せ、太三郎の昔話を耳に入れぬようにした。

山と積み上げられた骨付き肉がすっかりなくなり、缶チューハイにビールも尽きて、宴が中締めとなつたのは、昼も大きく回り、午後も四時にならうかという時刻だった。

「さて」

そこそこで酔っぱらった狸が寝そべり、ごおごおといびきを上げ始める中――先刻からむずむずの収まらない尻尾をぴんと立て、マミゾウは宴席から腰を上げた。

「ん、どうされた、佐渡の」

このまま二次会三次会、朝まで飲み明かして旧交を温める気満々だったらしい太三郎が、意外そうにふさふさの眉毛を動かす。マミゾウはわざとらしくポケットから出した金時計を開け、

「いや、愉しい宴にてすっかり忘れておりましたが、そろそろ特急の時間ですね」

「なんじゃあ、今夜は心ゆくまで飲めろと思っておったのに」
他の狸達も、何か非礼でもしかしたかと口々に詫び、引き留めてきたが——マミゾウは頭を下げてそれをかわす。

「申し訳ないですが、切符の都合でしてのう。すみませんがお暇いたしますぞ」

せめて見送りをと駆け寄る狸達を押しとどめ、そそくさと広場を後にする。結局ほとんど言葉も交わさなかった七九朗狐たちには軽く会釈して、マミゾウは社殿から駐車場へと戻った。

酔い覚ましに、売店で買ったソフトクリームなどを舐めつつ屋島を降りるバスを待つことにする。

「……やれやれ、あの御仁はどうにも苦手じゃな」

はあ、と大きく吐息して、指に付いたクリームを舐めとる。

太三郎は古くは同じ刑部狸の名代として平安の都を跋扈した仲だが、自分の未熟な頃を直接知る少ない知己だけになかなかどうしてやりづらい。佐渡の同族にこんな姿を見られたらどうしたものかと一人苦笑いするマミゾウだった。

ほどなくやってきたバスに乗り込む。昼中から酒臭い匂いをさせているのにはやや気後れしたが、バスの乗客には似たような酔っ払いもちらほら見られた。展望台の食堂でしこたま飲んできた手合いだろう。マミゾウはガラスに映った己の姿を確認し、一人頭を撫でつける。

まさかこの歳になって耳や尻尾を晒すような未熟な真似はしないはずだが、酔った後にはどれだけ気を付けていてもやりすぎることではない。化術の名手である大妖怪が酒に酔って失態をやらしたという逸話は、古今枚挙に暇がないのだ。

バスの中から見える高松の繁華街は、京都大阪にも劣らぬほどに見事なもので、二ツ岩狸の好奇の虫も疼いたが——ああ言つて出てきた手前、どこで地元の狸と出くわすとも限らない。後ろ髪を引かれる思いで高松駅へと向かう。実際、特急までの時間はもういくらもなかった。

「いや、思ったより忙しなくなつてしまつたのお」

小走りに改札を抜けてホームへ。さっきまでさんざん飲み食いしていたのでまだ腹はくちかつたが、松山に着くころには夜である。駅弁と酎ハイを二本買い込んで、マミゾウは発車ベルの中、特急いしづち23号の入り口に駆け込んだ。

幸い車内は空いており、切符の示す二人席のもう片方は開いているらしかった。

「うーむ。こりゃあ、わざわざ指定席買わんでも良かったのう。」

……太三郎殿にはちと悪いことをしたかの」

後ろ頭を掻きつつシートを倒し、酎ハイのプルタブを開ける。発車ベルの中、ホームを滑りだした窓の外を、高松の町並みが駆け抜けてゆく。

マミゾウがぐいと半分ほど缶の中身を飲みほしたところで、特急は徐々に速度を上げていった。

四国の北端、高松と松山を結んで二時間半。駅弁も平らげてすっかり腹も膨れ、酔いの中でまどろんでいた臉を開ければ、マミゾウを乗せた特急いしづちはすっかり暗くなつた松山駅のホームにあつた。終点の案内をするアナウンスにふああと大欠伸をして、「ごきごきと背中を鳴らして起き上がる。

この速度で走れば佐渡は楽に一周してしまうだろうが、それでも四国の四分の一も回つていない計算であつた。

「まったく、いい加減にそろそろ、佐渡にもまともな鉄道の本や二本くらい走つても良いと思うがのお」

口にすると思はれる事が多いのだが、鉄道は、狸や狐の好む乗り物である。長野の桔梗ヶ原に住む玄蕃丞狐など、丘蒸気化けるのを得意とした化生も多い。道路を我が物顔で走り、住処を踏み荒らす車に比べ、きめられた時刻にレールの上をおとなしく走る列車は、多くの狸が旅の足としていた。

そうしてマミゾウが思い出すのは角栄狸のことだ。

人間に化けて政治にかかわつた狸と言えば、戦後吉田茂のもとで辣腕をふるつた広川弘禅などが有名だが、かの田中角栄は真正正銘の人間でありながら、佐渡の狸から名譽狸の称号を贈られた数少ない人物だつた。列島改造論なる計画をぶちあげ、三国峠をダイナマイトで吹っ飛ばして新潟の豪雪をなくし、そこで出た土砂で佐渡と新潟をつなぐ道を埋め立ててしまおうなどと言う大法螺を吹いて大いに国中を湧かせたのである。

彼はまごう事なき人間であつたが、その終焉を含めて、いつそ人間にしておくのが勿体ないほどの名狸ぶりであつたとマミゾウは思う。

——さて。

本州と地続きの感のあつた高松とは異なり、色濃く昭和の香りを残す松山駅前を出て路面電車に乗り換え、城下をぐるりと回るように市内を揺られて20分。

終点となる大正のころのハイカラな趣を残した駅舎を降り、夜だと言うのに賑やかなアーケードを抜ければ、足湯の湯気と硫黄の香りの中、古びた道後温泉の本館が姿を現した。

「お待ちしております」

今日の宿はそのすぐ向かいの老舗である。ホテルの門前で出迎える、大正袴のこすぶれをした従業員に領き、悠々とチェックインを済ませる。宿はここに来るまでの間に事前にスマートフォン経由で予約済みであつた。

……ちなみに、マミゾウは幻想郷でもインターネットを使っている。機材や電力は外から持ち込んだが、流石に回線ばかりはどうしようもないので、迷い込んだ無線LANの回線の尻尾を捕まえ、こっそりとパケットを偽装して拝借していた。暗号や通信プロトコルの進歩は日々目覚ましいが、化かすことに掛けるのはプロの狸にかかれば解説も偽装も朝飯前である。

「いやはや、便利になつたもんじやな。情報化社会さままじやなあ」

まずは一服。汗もかいたところでひと風呂浴びようと、浴衣に着替えて下駄をつっかけ部屋を出る。向かうは道後温泉の本館だ。

大勢の客が詰めかける湯屋の大浴場は、なるほど見事なもの

だった。神の湯の名に相応しい石造りの浴槽に浸かつて、豊富な湯量の湯船に手足を伸ばす。あちこち歩き回った疲労が心地よさに溶けてゆくようだ。

頭の上にタオルを乗せて、鼻歌など歌っているうちに——ふと、湯船の反対側に目がとまった。

「ちょっと、メリー、くすぐったいっ……」

「いいじゃない、たまには童心に帰るのも」

「め、メリーの母国は随分と解放的なね……!?」

混雑の中、ひときわ目を引く二人連れの若い娘。片方は短い黒髪のスレンダーな少女。もう一方は金髪を結ったに碧眼の白い肌だ。金髪の少女はメリハリのある身体を惜しげもなく晒し、もう一方の娘の背中を泡だらけのタオルで流している。

「ほら蓮子、そんなに逃げてちゃちゃんと洗えないわよ?」

「だ、だからなんだかさつきから手つきが——ひゃんっ!?」

洗い場の片隅に、実に眼福な光景が広がっていた。

(うむ。……うむ)

こくこくと頷きながら、頭の上に載せていた眼鏡を下ろし、マミゾウは曇るレンズを拭いて、きやいきやいとしゃやいでいる少女達を眺める。目の前の微笑ましい裸の触れあいに、思わず頬が緩んでいた。

そんなマミゾウに気付くこともなく、ふざけ合つて抱き合う泡まみれの娘達。若々しさの溢れる白のお尻やつんと上向いた小ぶりの乳房に目を奪われているうち、ついむらむらと声を掛けそうになり——

「……いかにいかに」

ざばりを湯船から上がりかけたところで思いとどまり、マミゾウは慌てて浴槽に頬まで顔を沈めた。いつの間にか飛び出し

かけていた狸耳を慌てて髪の中に押し込み、すっかり浮かれている自分を自覚する。

(邪念はいかな。うむ。儂もいちおう、形の上だけは寺におけるのじゃし、そもそもこんな旅先で、しかも刑部殿の膝元じゃぞ。騒ぎを起こしておる場合か)

ぶんぶん首を振つて湧きあがる欲望を振り払い、大きく深呼吸。目を閉じて百を数え、ゆっくり瞼を開ければ、娘たちの姿はなくなっていた。

軽く安堵の息を吐き、マミゾウは湯船の縁に頬杖をつく。

とは言え実に『美味しそう』な娘たちだった。久々に湧きおこる気持ちは、やはり結界の外に出てきている解放感からなのだろうか。普段はいつも張り付いて離れないスキマ妖怪の式の気配もなく、久々にのんびりできているのは確かである。

そう、ここはどうせ結界の外なのだ、わずらわしい妖怪と人間の協定もない。何をしても咎められるはずもないし、ちよつとしたつまみ食いくらい——

「……うむ。欲求不満なんかのう」

一人ごちて、マミゾウは手桶に組んだ冷水を被つた。若い娘の肌に囲まれ、油断するとむくむく頭をもたげてくる邪念を振り払わんと、何度も水をかぶり直す。

最初は酔いのせいかと思っていたが、どうも違うらしい。そもそも、マミゾウほどの化け狸となれば息をするように人として振舞える。普段なら耳や尻尾を気にすることなど滅多にないはずなのだ。四国に入った頃から軽い違和感はあったが、松山に降りてからその傾向は一層強くなっていた。

ここ四国は狸の本拠、いまだ根強く多くの狸達が生きる霊場である。ゆえに普段は押さへ込まれている獣の本能、原初の獣

の鼓動が、マミゾウの胸を強く打つのであった。

どこか夢の中のようなぼうつとした頭で身体を拭き、二階の大広間へ出る。ここでしばし湯上りの身体を冷ますのだが――

「おんや」

目に留まるのはさっきの娘達だ。一足先にここに来ていたらしい。浴衣姿で扇風機の前、団扇を忙しく動かしつつ、湯上りおやつに名物の団子などをつまんでいるようだった。

二人で寄り添う少女達を見ているうち、またむらむらとよろしくない衝動がこみ上げてきそうになったので、マミゾウはヘアピンに化かして持ち込んだ煙管を取り出して一服を始めた。

ひとり、無心に紫煙を吐き出していると、いつの間にか彼女達の一人、黒髪のほうの少女が傍に近づいてきていた。

彼女はじつと、不思議そうにマミゾウを見つめてくる。

「……………」

ちょうど相手の金髪の少女が席を外したところらしかった。

少女の熱烈な視線にむずがゆいものを覚えつつ、マミゾウは困惑を隠しながら眼鏡を押し上げる。

「どうかしたのかの」

「あ、いや……その、それ、カッコいいなって」

「んむ？」

少女の視線に、マミゾウはひょいと煙管を持ち上げた。幻想郷の人里で見つけた螺細工の逸品で、一目で惚れ込んで以来、マミゾウはずっと愛用している品だが、彼女はそれに興味を示しているらしい。

成程、いつもの癖で取り出していたが、こちらでは煙管で煙草を呑む者も少なくなっているのだろう。まして女の成りではなおさらか。

実際のところ、繊細な螺細工の煙管など、^ヤ脂の強い煙草で一服すればあつという間にくすんで見えたものではなくなってしまう。基本的には観賞用の品で、実用に耐えない代物というわけであり、幻想入りして然るべき品なのだった。

すばと煙を輪にして吐き出して見せ、マミゾウは笑みと共に少女を窺った。

「――良ければ、一服どうかの」

「いいんですか？」

「儂の吸いさして良ければ、じゃがな」

勿論ですと頷き、娘はばあつと顔を輝かせる。なんとも可愛らしいものだ。

「ちなみにおぬし、煙草は――」

嗜むのか、と聞こうとした直後、娘は煙管に口を付け、水でも飲むように煙を吸い込んでいた。火皿が赤く染まり、少女はたちまち顔を青くして煙を吐きながら咳き込み始める。

「慣れておらんようじゃの」

「……けほっ……今初めて、吸いました」

濁点だらけのしわ枯れ声で答える少女。どうも一気に肺まで煙を入れてしまったらしい。涙目になってえずく少女の背をさすってやり、マミゾウは呆れながら堕ちた煙管を拾い上げた。

無茶な話だった。紙巻きも吸わないのに、いきなり刻み煙草は無理があるだろう。

しかし娘は、諦める様子もなくもう一度煙管を拾い上げ、顔をしかめながら煙を吸おうとする。

「待て待て。慣れても居らんのに無理せんでも良からう」

「でも、こんな機会そうないですし、やっぱり何事もやってみないと！」

「……その心構えは立派じゃがなあ」

げほげほと咳き込みながら煙管を離そうとしない少女に、ま
たもむらむらと宜しくない気分が沸き上がってきた。

好奇心だけで後先考えずに突っ込み——自分が危険な事に手
を出しているという自覚もない。火傷をしても懲りることなく、
同じことを繰り返す。

これはつまり、誘っていると取られても仕方ないだろう。

(……据え膳、かのう)

マミゾウの脳裏を、このまま彼女を攫ってしまおうかという
思考がよぎる。どうせ彼女も旅の身の上だ。すぐに誰かに気付
かれるとすることもないだろう。その間にたつぷりと若い娘を
堪能してしまえば——。

(……む)

無意識のうちに少女の肩へと伸びかけた手を慌てて戻し、マ
ミゾウは近づく気配に振り向いた。

「おや、お連れさんのお戻りのようじゃな」

「蓮子、なにしてるの?」

「何って——」

そこで少女はようやく、自分が懸命にジュースのストローを
吹いているのに気付く。眼を丸くする少女にからからと笑い、
マミゾウは椅子から腰を上げた。

「さて、湯冷めしても面白くないし、お前さんたちの逢引を邪
魔しても悪かろう。儂はここから退散するとしようかの」

手にした螺鈿細工の煙管をくるくると回してウイंकを一つ。
顔を紅くしてうろたえる娘達に微笑んで、マミゾウは雑踏に紛
れて大広間を後にした。

そろそろ店じまいとなったアーケード街の自動販売機で買っ

たビールのプルタブを引いて、宿の窓から道後の街並みを見下
ろし、ぐびりと一息。

「ふむ。……ちよいとばかり、勿体なかったのう」

夜に沈む松山の街並みを、頬杖ついて見つめながら。化け狸
の夜は更けてゆく。



「ふわあああ……よう寝たのお……」

結局、どうにもおさまらずに夜街に繰り出して艶店をハシゴ
し、半ダースばかり酒瓶を開けてしまったが、その程度で化け
狸が宿酔いになるはずもない。翌朝、まだ日も出る前に起き出
して布団の上で大欠伸をすると、マミゾウは、手早く身支度を
済ませて宿を後にした。

「さて」

市内バスを乗り継いで1時間。砥部の細い街路を巧みに擦り
抜けてゆくバスに揺られてさらに15分。遍路傘が行き来する
巡礼札所を通り抜け、次第にバスの中の人影もまばらとなる。
山道をすり抜け、古い石壁の続く狭い道や山中の分校を過ぎる
事には座席のほとんどが空席となっていた。

目的地となる関谷に着く頃には、車内に残るのは地元の人
と思しき老人のみで、バス停を降りる時も運転手から珍しい顔
で見られてしまう。

古びたバス停を後に、家もまばらな小道をふらりと歩
いてしばし。勝山の天満宮をひやかしながら、マミゾウはよう

やく今回の旅の目的地へと辿り着いた。

「おう、ここか」

道端に立つ小さな屋根。狸の石像を並べ、幟に囲まれた社殿。

松山は山口霊神——四国八百八狸を束ねる総帥、隠神刑部を祀る社である。

「これは……なんとも、まあ……慎ましやかなもんじゃない」

小ぢんまりとした社を前に、これが仮にも四国八百八狸の総帥の住処なのかと、マミゾウは溜息をついた。

鳥居も燈籠も見当たらず、社の所領も猫の額のように。参道を行き来する行列があるわけでもなく、出店も社務所もどこにもない。社自体は寂れ放題というわけではなく、手入れも掃除も行きとどいているが——人気のなさは如何ともし難い。

隣には小狸たちの像に囲まれるように、刑部狸の立派な石像が奉納されていた。こちらにも名のある職人の手によるものか、威厳ある雄狸の貫録を八畳敷きまでしっかりと写し取った素晴らしい出来だが——こんな寒村の道端で、いったいどれだけの者がこれを目にするのだろうか。

持ってきた珈琲の缶を並べ、一つを開けて口を付ける。珈琲は煙草と同じく匂いの強いものとして、獣から変じた妖怪は嫌うのが常だが——隠神刑部は特にこれを好んでいた。

かつての主にして恩人を前に、深く手を合わせしばし。マミゾウは深い息を吐く。

「さて、刑部殿よ。常頃より四国総帥なんぞとのたまっておるのだから、今でもさぞ御膝元は賑わっておるんじゃないかと思つたが——なんとまあ寂しい限りじゃない」

これでは、本邦の妖怪の地位を天狗や狐どもに脅かされることも仕方ないものかもしれない。

妖怪の生死と言うのは、人や動物に比べるとあいまいなものだ。よほどの事がなければ死ぬことはないし、仮に現世で活動するための肉体を失つてもその伝説、伝承が残る限り消滅することはない。まして大明神としての神格も持ち合わせた化け狸に、明確な死というものはないと言つていいだろう。

しかし、件の多摩騒動の折、彼が命を落としたという事は幸か不幸か、衝撃を伴うニュースとして全国を駆け巡り、この国の妖怪社会に深く知られていた。どういう訳か、一部の人間達にまで。

事実、こうしてマミゾウが訪ねても、彼の声どころか迎える侍従すら姿を見せない。決して荒れている訳ではないところを見るに、彼の眷族までも散り散りになっているとも思えないが——いずれにせよ、これは彼の存在がすっかり忘却されたことを意味し、その神格から零落していることを示していた。

「……せめて、恨みごとの一つくらい、残していつて貰えると思つておつたのじゃがなあ」

マミゾウは、懷から古びた手紙を取り出す。

隠神刑部が命を落とした多摩騒動において、尽力した四国の狸達とは対照的に、マミゾウはこれに対し静観を守った。多摩からの使いに対して知らんぷりを決め込み、配下の佐渡の狸四天王達以下、六百余の狸達に関与を禁じたのである。

直後にははるばる刑部狸から、多摩の森に協力を促す手紙も送られてきたが、マミゾウはこれを握りつぶした。

いち早く人間社会に溶け込んでいたマミゾウは、現代の人間達に対抗しようというのがいかに無謀なことか熟知していた。下手な肩入れは多摩を助けるどころか、佐渡の狸達まで共倒れになるとの判断だった。

結果として佐渡の狸達は勢力を失うことなく現代にまで生き延びているが——果たしてそれは正しいことだったのか。佐渡の二ツ岩の胸の中には、ずっとその思いがあった。

四国狸の名代として——同じ古老の狸として。あの時の多摩に、刑部たちと共に居なかったことは、ずっとマミゾウの胸の中に残る後悔だった。

「……時代、じゃなあ」

古い手紙を陽にかざし、なんともやるせない思いを吐き出し、懷から煙管を出してひとしきり感慨に浸る。

紫煙の立ち昇る空には鶯が高く舞い、悼むように鳴いていた。



なんとも哀しいものを見てしまったことへの衝撃もあったろうか。社の回りをぼんやりと巡り——といっても、数十歩も歩けば全部見て回れる程度のちいさなものだが——マミゾウは山口靈神をあとにした。

「さーて、どうするか……」

ここは市街地からも大分離れた山奥で、バスは1時間に1本しかない。寄り道しながらでも10分もかからずに来てしまったので、今から戻ったところで帰りのバスまでかなりの時間を待て余すことになる。来た方向のバスを待とうにも同じこと。

「と言って、暇を潰すような店も見当たらんしのう」

適当に鳥にでも化けて飛んでいっても良いのだろうか、一応は余所の狸の領地であまり目立つ事はすべきではないだろうし、

妖怪への怖れが足りぬ外の世界で力を使う事は余分な消耗も招く。ついでに言えば、風に流れる雨の匂いもあった。天気予報によれば四国をかすめるように台風が近づいており、午後からは雨天になるらしい。

まさか市内まで戻る間に力尽きるとは思えないが——旅の間はそれなりに気を払うべきことだろうと考えて、大まかに進む方向だけを確認して歩き出す。

「まあ、しばらくは、空も持つじやろう」

来た道を戻れば、行き道で通り過ぎた遍路の寺に出るはずだ。そこから歩いて適当にバスを待つことにする。

山口靈神を出てすぐ、マミゾウは道端に小さな商店を見つけた。近くにあまり集落も見えぬというのにどこに商売をしているのか分からないが、菓子やら雑貨やらを売っている店だった。朝食代わりにと適当にクリームパンと牛乳を見つくり、代金を支払う。

店番をしていた女はこんな所まで何しに来たのかと不思議がついていたが、刑部狸のことを口にしてみると、すぐに納得した様子だった。どこからと聞かれ、佐渡からと答えれば、遠いところから御苦労さまと頭を下げられる。

「……むぐ。あの分では案外と参拝客もおるのかもしれんな」パンをかじりながら店を出て、寂れ放題とは少し言い過ぎだったかも知れん、と改めるマミゾウであった。

クリームパンを腹に収め、牛乳を流し込んで。しばし、バス停を辿るように車もまばらな道を進んでゆく。ほどなく遍路道へと出て、白衣に金剛杖をついた遍路傘たちとすれ違ふようになった。

「……ん？」

——半時間も歩いた頃だろうか。

丁度、四国札所四十六番を掲げる医王山養珠院の看板が見えてきたときだ。遍路傘に混じって寺の門前の掃除をしていた若者が、驚いたようにこちらを見た。

「あなたは……!!」

驚き目を丸くする若者に、マミゾウもすぐに彼が狸であると察した。

人目を避けるため近くの路地へと場所を移すと、若者は途端に畏まって化け姿を解き、耳と尻尾を出した。自ら本性を晒し、相手を欺いていない事を誓う作法である。

「此度この場所、お初にお目にかかります。どうぞ親分さんからお控えください」

マミゾウは驚いた。若者の仕草は、四国任侠狸の古流の仁義なのである。一瞬、対応を忘れかけ、マミゾウは慌てて宙返りし、どろんと煙の中に耳と尻尾を見せた。ふさふさの尻尾の見事な模様様に、若者はおおと息を呑む。

「手前、ご覧の通りの隠居ものじゃ。どうぞ、そちらさんからお控えなさっておくれ」

「いえ、こちらこそ化術の及ばぬ若輩者。是非とも、親分さんからお控えください」

「二丁寧に痛み入る。再三のお言葉、無礼とは心得るが、手前、これにて控えさせて頂く」

作法通りにマミゾウが控えると、若者は静かに畏まって、鼻先を地面につけんばかりの深いお辞儀をした。長い尻尾がくるりと輪を描く。

「早速、お控えくださって有難うございます。粗忽者ゆえ、前後間違いましたる節は、まっぴらご容赦願います。お樂に、ど

うかお樂に。

——手前、生国と発しますは伊州久谷は上野、大宮八幡のビヤクシン大柏住まい、学にて身を立てんと算盤を弾き書を汚していたところ、伊予狸一党に縁をもちまして、四国八百八狸総帥、隠神刑部より杯を頂き、大宮八幡の境内に金森大明神の社を任せられます、本名を金平と申します。化術も半ば、稼業、昨今の駆出し者でございます。佐渡の親分さんにはご挨拶の遅れましたところ、並びに数々のご無礼、化けの足りぬ半尾者のすることとお笑い頂ければ無情の幸い。これで一つ親分さんにはお見知りおき頂きまして、よろしくお願い申し上げます」

お手本のように見事な仁義であつた。昨今、よほどの古狸でもここまで礼に乗っ取った作法はこなさない。マミゾウを佐渡の貉大将と見抜き、最大の礼をつくした金平狸の律義さと博字さにマミゾウは感服する。

「——最近じゃ滅多に機会ものうなつたからのう。当世の流儀には不心得ゆえ、旧弊の流儀にて御免こうむる。不作法お許しあれ、金平殿」

「いえ。このような場所でお目にかかれるとは光栄です。佐渡の二ツ岩巖王様」

「ん。その名前はあまり好かんのじゃ。いまはマミゾウで通つておる。皆もそう呼ぶよ」

微笑むマミゾウに、金平もようやく口元を緩める。

大宮八幡の金平狸と言えは、学者肌で身を立てた逸話の他にも、に宮司の大西家に神祇の御使いとして取り立てられたことでも知られている。算術を良くし書にも通じ、八幡のビヤクシンの根元に社殿を持つ四国名狸の一柱である。

勤勉にして博字、恩義を重んじることから人々にも慕われ、

月のない夜には明かりを持ちだして人々の先導をすることもあるという。配下の狸達にも人間の学問を修めさせることで人との融和を進めていると、マミゾウは聞いた覚えがあった。

「いやはや、人に混じつてぼらなんていあとは、聞きしに勝る勤勉ぶりじゃのう」

「いえ、僕なんかまだまだです。未熟者ゆえ、まだまだ恥じることばかりで。これも名狸になるための修行と心得ています。マミゾウ……様は、はるばる佐渡からどのような御用向きで？」

「そう構えんでもよからうに。特に深い理由なんぞありませんよ。ぶらりと観光じゃ」

「はあ……」

ウインクと共に答えるマミゾウだが、金平はいまいち得心のいかない様子だった。それも当然で、社殿を持つに至った狸達はひよいひよいと海を渡る事などないものだ。マミゾウの旅好きは有名だが、これは彼女が大分特別なのである。

伝承、伝説はその生まれた土地に根付くものであるし、余所に同じ名の化け狸が祀られることでもなければ気軽に離れることも難しい。

妖怪から変じた外つ神は、神籍にこそその名を刻まれるが、神有月とても、出雲からまますお呼びはからぬものなのだった。

「お越しであるのなら一言頂ければ、こちらからお迎えに上がりましたのに」

「そう堅苦しくしないでくれ。ちと旅で寄りたくなっただけだよ。あまり大仰にしてはお主たち、松山の狸に迷惑もかからうしな」

金平は伊予狸の一門で、刑部狸の直系であつたが——ここで

出会つたのは全くの偶然だった。刑部自身とは因縁もあれ、マミゾウは彼の恩義を無視して袂を分かつた身である。松山の狸には恨まれているに違いないと思つていたし、今更合わせる顔も無いと考え、できるだけ波風を立てぬように帰るつもりでいたのだ。

「そんな、お恨みなど!! 巖王様——マミゾウ様が、こうして刑部様に逢いに来て下さつた、僕達にはそれで十分なのです。はるばるお越しいただいたことを喜ばぬ訳がありません」

なるほど勤勉で知られる金平狸、聞くよりもなお真摯であつた。お気楽で万事適当な狸にはらしからぬ実直さ。それゆえに彼はこうして今も人々に慕われているのだろう。

一人納得するマミゾウに、金平はそうだと手を叩き、

「マミゾウ様。お邪魔でないようならば、本日、お城のほとりにて僕達伊予狸の寄り合ひがあります。ささやかな宴も用意しておりますが——宜しければお越しいただけませんか。ここでお会いできたのも、刑部様の御縁でしょう」

「んむ——」

面倒じやな、と半分思いつつも、松山の狸達の近況を知りたい機会でもあつた。刑部亡き今、松山には太三郎のような古くからの知己もおらず、ここまで低頭する金平の頼みは断りづらい。ここまで誠実に申し出されれば、むげに断るにも難しかった。

おおよそ、マミゾウが苦手とするのは、まこと誠心誠意から出る言葉である。

「わかつた。折角のお誘い、断るのも悪からう」

「ありがとうございます! ……折角ですのでご案内差し上げたいのですが、あいにく自分は御行がありまして——なんでし

たら使いの者を出しますが」

「いんや、それには及ばんよ。折角じゃ、一人でぶらつきたいところだな」

答え、マミゾウは元の旅装へと化け直す。

また深く一礼して見送る金平狸を背に、思わぬ縁もあるもんじやなと呟き、ふと氣付けば。

聞き覚えのあるエンジン音が、遠ざかってゆく。

「——おう」

話に夢中になって、すっかり時刻表のことを忘れていたのだ。見上げた先を遠ざかってゆくバスの車体に、マミゾウは眉を寄せて後ろ頭をかいた。

▼3

「やーれやれ……さんさんじゃったな」

結局、次のバスを待ってもいられず進むうち、とうとう乗り継ぎ地点の森松まで歩いてしまった。刑部の社を出てから軽く二時間近くが過ぎている。途中から雨まで降りだし、慌てて傘を用意したが、風が強くすつかり脚元から濡れ放題だ。

幸いにして台風の前線は松山を外れていたため、この分なら夜には治まるだろうが――

「宴会に出る前に、一度宿に戻って風呂にでも入らんとあ」
 すぐ濡れの服を見下ろしてばやきながら、市内へ戻るバスへと乗り込んだ。

私鉄の松山駅から道後に戻って湯船につかり、時間までをのんびりと過ごす。思っていたよりも疲れの溜まった脚のこわばりを揉みほぐし、大広間で涼みがてら甘味に舌鼓を打つ。

制限を待って、マミゾウは再び宿を出た。

目指すは天下の名城・松山城。ぐるりと堀に囲まれた勝山の上に聳える伊予松平家の城郭である。かつて隠神刑部がお家騒動に一枚噛んだという名城も、いまは観光名所へと整備し直されていた。夜も遅くなれば山頂へ登るロープウェイは停止するが、妖怪狸たちにそんなものは何の障害にもならない。

魚に化けて城の堀を泳ぎ渡り、人に化けてチェックを抜け、鳥や虫に化けて空を飛び、

数十数百の化け狸達が、人のいなくなった城内に集っていた。

ずらりと陣取った狸達は、天守閣のすぐ傍に見事な御殿を立てて酒盛りの最中である。そこには既に伊予狸の名門がずらりと並び、マミゾウを出迎えていた。

奥の席には稲荷山六角堂を預かる榎大明神こと六角堂狸、東雲坂の毘沙門狸など、伊予の狸番付の一番に名を連ねる名狸たちが勢揃いだ。松山市内に留まらず、四国の古株として名高い、遠く新居浜は一宮神社の小女郎狸までもが顔を揃えていた。

「ようこそお越し下さいました、二ツ岩マミゾウ様!!」

「いやいや、待て待て、僕はそこまでされんでも――」

深々と頭を下げられ、一番の上座（神）を勧められてマミゾウは慌てて彼等を止める。ここまで上の上の扱いをされるとは思わなかったのだ。刑部への不義理を感じ、後ずさろうとするマミゾウだが――

「そう仰らないでください。ささ、どうぞ!」

大明神の使いに相応しい神主姿に身を改めた大宮八幡の金平狸が、素早くマミゾウの後ろに回り込んでその背中を押し、奥の座へと押し込んでしまう。

たちまち宴はどつと湧いた。高名なる佐渡の二ツ岩団三郎様に――と、伊予の狸達が上座に詰めかけ、次々と杯を差し出してくる。その顔ぶれも見事なもので、椿神社のお紅、西林寺の大狸、高井八幡の三光姫狸と、いずれも劣らぬ逸話を持つ者たちばかり。伊予ではこんなにも多くの狸達がそれぞれに社殿を持っているのだということに、マミゾウは内心で舌を巻いていた。

はじめは神妙に杯を受けていたマミゾウだが、人懐こく個性的な伊予狸達に、いつしか耳と尻尾を露わにするほど馴染んでいた。彼らもまた無駄におもねることもなく、すぐに佐渡の二

ツ岩と打ち解けていく。

酒が回ればすぐに歓声が上がリ、若い狸達が余興を始める。

太三郎の化術に比べれば拙いものだが、彼らには今を楽しむ狸達の力強い躍動があった。一緒になって腹鼓を叩きながら、マミゾウはいつしか笑っていた。

「よし、僕もひとつ行くとするか」

居ても立っても居られなくなり、マミゾウも舞台へと上がって轟雷のようなドラムビートを披露した。最近知り合って意気投合した付喪神・堀川雷鼓直伝のドラム捌きに、狸達はやんややんやの大喝采。めいめいに腹鼓を叩いて応じ、宴のテンションをますます上げていく。

アンコールの嵐に、松山城下はちよつとしたライブハウスの体となった。

「——なんだい、ずいぶん賑やかだねエ」

立て続けに五曲ばかりを演奏し終えて、マミゾウが額の汗をぬぐっている——宴に新たな声が割り込んでくる。

「おお、遅いぞ、お袖の」

「仕方ないじゃないのサ、今日も遅番だよ。まったく、お役所仕事だなんて嘲されても楽なものじゃないねエ」

遅れて現れたのは美しい雌狸であった。しなりと色っぽい肢体をくねらせ、金銀の糸で縫い取りされた優雅な袖を纏った彼女は、するすると上座へ向かい、マミゾウの隣にすくと腰を下ろす。

「お見限りじゃないですかえ、殿王様」

「おんや」

切れ長の目に艶めかしい唇、人の姿もまたじつに、色気のある悩ましい娘の姿の彼女こそ、松山狸番付、西の別格——

股腹大明神、お袖狸。

江戸の昔から人間達の暮らしを見るのを好んだとされる彼女は、城の堀端にある榎と社殿に祭られ、商売繁昌、病氣平癒、縁談と、数々の御利益で知られている。その神通力で数多くの人助けをしたことから、いまでも松山の市役所前に祀られ、人々に親しまれていた。

「そうか。おぬしもこちらじゃったか」

「そうですよ。嫌だ、お忘れだったんじゃないでしょうねエ。」

殿王様？ ……折角いらつしやったのなら、いの一^{あたし}番に妾のところにくてくだすつてもいいじゃありませんか。ねエ？」

「……そう言わんでおくれ」

切れ長の目でちらりと射竦められ、マミゾウはバツの悪い気分ですくめる。お袖とマミゾウは、日露戦争での大陸への出兵の折に知り合い、杯を交わして知己となっていた。

「そういうア金平、喜左衛門さんは来てらつしやらないのかい？」

「そうなんだ。お誘いしたんだけど、大事な約束があるって」

「なんだい、また基会所かい。あの爺さんでもいい加減飽きないねエ。もう八百年やそこら続けているじゃないサ」

「とつても見どころのある子供がいるんだつてさ。今度こそ本因坊を仕込むだつて息巻いてるよ」

「呆れたもんだね、せっかく殿王様がお出でだつてのにサ」

お袖はマミゾウに寄り添い、杯を差し出してくる。ひやりとした彼女の指から杯を受け取ってぐいと飲み干し、蒔絵の盃へと化かして返せば、お袖は白い喉を反らして美味そうに酒精に口を付けた。

ともあれ、これで役者は揃った。伊予の狸達はいよいよ本番

とばかり盛り上がる。

「どうです、マミゾウ様、伊予は」

「良い所じやなあ。皆、とても生き生きとしておる。実に楽しくてうらやましい限りじやよ」

「あら、お世辞なんて言わなくてもいいんですよウ」

「世辞なものかね。お袖殿も、羽振りが良くて結構じやなあ」
城に入る前、マミゾウはお袖狸の祀られる八股榎大明神の傍を通りかかったのだが——その社には彼女とその眷族が緑を食むのに十分な石高の米や酒、花に甘味までが備えられており、丁度地元の若者と思しき者たちが月例の参拝をしているところだった。人間が御幣を立て真言に般若経まで唱え、熱心に拝礼している姿など、マミゾウは己の社では例祭の時くらいしか見たことがない。

「あら、妾アそんなつもりで言ったんじゃないですよウ」

「わかっておる、年寄りの僻みじやよ」

ぐいと杯を干し、マミゾウは煙管を出して一服する。

分厚い雲で月は見えぬが、まったくいい夜だった。立ち上る白い煙に、しばし思いを馳せる佐渡の二ツ岩。

そんな、時だ。

「まったく、刑部様も間の悪いこと。こんな日に使い走りの手紙なんぞ送ってこなくったつていいでしょうにねエ」

「……なんじやと？」

聞き捨てならない名前が聞こえ、マミゾウはずれかけた眼鏡を直し、声を上げる。

「ちょ、ちよいと待て。いま何と言った？」

「なにつて、刑部様からのお手紙ですよウ」

「……ま、待て。待て。どういふことじや？ 刑部殿は、多摩

の騒動でお亡くなりになっておるんじゃない？」

勢い込んで尋ねるマミゾウに、しかし金平とお袖は顔を見合わせて、

「うふふ、何を仰るんですよ、厳王様。刑部様がお亡くなりになるなんて、そんな頓稚なこと、天地がひっくり返ったつてありやあしませんよウ。ねえ金平？」

「はい。今も僕達は、刑部様からあれこれとご指示を頂いています。……ご存じなかったんですか、マミゾウ様？」

「……本当、なのかの？ いや、しかし僕は確かに、多摩で亡くなられたというのを——」

「嫌ですねえ厳王さま、そんな与太話を信じてなさったんですのねエ」

「なんじやと？」

混乱の中、上手く思考がまとまらない。この20年、ずっと信じてきたことが全てひっくり返されたのだ。酔いも一気に醒めていた。

「じゃア厳王さま、厳王様は、刑部様のお顔を覚えておいで？」

そんなものの、覚えているに決まっている——と言いかけ、マミゾウは愕然とする。確かに記憶にあるはずの、刑部狸の姿も、声も、喋り方も。まるで思い出せないのだ。お袖はくすぐすと笑いながら、杯をあおった。

「ほら、ご覧なさいな。そもそもねエ、妾たちだつて刑部様のお顔を知らないんですよ」

「あん……？」

お袖の言葉の意図が分からず、マミゾウは顔をしかめる。

「言葉どおりですよウ。ホラ、いつだつて刑部様のお報せを持つてくるのは、御使いの豆狸たちでしたよねエ？ そういふこ

とでございますよウ」

「なんと……」

すとん、とその場に腰を落とし、マミゾウはしばし呆然としていた。ゆつくりと、お袖の言葉を噛み締めながら、小さく肩を震わせる。

やがて震えは全身に伝播し、大きく激しくなっていた。

「くくく……つかつかつかか!! なんと、なんともまあ、意地の悪いことをされるのう、刑部どの！」

まったくもって、間抜けは儂ひとりじゃったか！」

とうとう堪え切れなくなつて、マミゾウは顔を覆つて笑いだした。肩を震わせるマミゾウに、お袖はそつと寄り添う。

「厳王さま、こゝ四国じゃア、阿波の金長様、屋島の太三郎様、松山の刑部様、揃つて皆が皆、四国八百八狸の総帥だつて名乗つておりますけどもねエ、ちよいと考えればホラ、どれが本家だ元祖だつて争いになりそうなんじゃアありませんか。」

それでも、伊予も讃岐も阿波でも、誰もそんなこと言い出したりしないんですよ。ねエ? 厳王様が名代を務めてらつしやつた頃からそうだったんじゃありませんか。刑部様は御自分のお名前を名乗らせた狸を、そこいらじゅうに遣わせてございましたでしょうよ。どうして今、真つ正直に御本人が刑部狸を名乗つてらつしやるとお思いで?」

「……………成程、成程のう…………」

こうして言われてみれば、まったくもつともな話ではあった。マミゾウは一人、顎をさすりながらしきりに頷く。

聞いた話では、多摩の騒動において、刑部はいつも太三郎の脇に控え、その補佐に徹していたという。

てつきりあの場の仕切りを、最も神格の高い太三郎に任せた

ということだと思つていたが——あれが本人ではなく、かつての自分と同じような、刑部狸の名代であつたとすれば納得もいく。

「そりやそうじゃなあ、確かに」

「今も昔も、妾たちは皆、髭の端から尻尾の先まで刑部さまのお心通り。ずうつと昔から、そうでございましょうよ。だからどこに四国八百八狸の総帥が居たつて喧嘩にもなりやアしない」

マミゾウは大きく深呼吸をして、ゆるゆると首を振つた。この20年、ずつと大事に懐に収めていた手紙を取り出し、苦笑いと共に思いでそれを破り捨てる。細かい紙片になつたそれをよく見れば、枯れた一枚の葉っぱだった。

「……いかな、儂としたことが、すっかり騙されたわい。まったく、実に厄介な御仁じゃな、刑部殿は!」

かつて——かの聖徳王の時代より生き、長きにわたつて世を騒がせた狗神と名乗るその獣は、四国に奉じられいつしか隠神と名を変えた。その存在すら闇に伏して「居ぬ」神とし、同輩の化け狸すらも化かす、不在にして四国狸達を掌握する、この国の狸の総帥へと。

そして今も。京都を追われ、多摩で散り散りになつていても。八百八狸総帥をその頂きに、狸達は変わらず日々愉快にこの世を生きているのだ。

「厳王様、ですからねエ、妾からもお願いしますよウ、どうか金長さんにもお会いなすつてくださいますしな。七代目は丁度、厳王様を探しに佐渡まで旅した水呑み沢の文太狸と御同輩。積もるお話もお怨みもありましようよ。あの折に死んだふりを決め込んで、多摩の同族をほつたらかしたツケはお払いなさらないきやア嘘つてもんでしよう」

「……………うむむ」

まったく言い分に、マミゾウは思わず考え込む。まったく反論のできない話である。

いや、あるいは――

（この旅自体、それに気付かせるためのものだったのかもしれないな。……八百年も経ってこの有様かと、刑部殿に叱られたと言ふことかろう）

「いやはや、まったく、面白き事よ」

くすりと微笑み、マミゾウは思い切り盃を傾けた。



「んむ？」

宴もたけなわ、すっかり良い気分です酔っていたマミゾウは、懷で振動するすまゝとほんに気付いて身を起こした。眠い目を擦り開けてみれば、緊急連絡用のメールの簡潔な文字が並んでいる。

――佐渡は相川、二ツ岩大明神にて火災。

「なんじゃと？」

看過できない報せであった。思わぬ一報にマミゾウは眼を丸くし、お袖が一緒になって画面を覗きこんでくる。

「どうなさったんです？」

「ちとな、儂の社殿で無作法を働いた輩が出たようじゃ」

「――なんですって!?」

金平が叫び、あたりの狸達もどよめいた。

ニュースサイトを検索してみると、ついさっきタイムラインに並んだ話のようであり、まだ詳細は分からないままだった。どうやら燃えたのはお籠り堂であるようだが、本殿への被害は判然としない。

このタイミングでまるで見計らったかのような火災、あまりのきな臭さに、マミゾウは眉をしかめる。

（これは――ちと、禅達に押し付けるには無責任じゃな）

せつかくの酔いも一気に冷めてしまった。マミゾウは手早く荷物を纏め、伊予狸達の前に立つ。

「今宵の宴、まことに嬉しい限りじゃ。心ゆくまで語りたいと思っておったが、急用が出来てしもうた。名残惜しいが、儂も自分の社殿を焼かれて黙っておるほど老いても居らん。すまんが、ここで中座させて貰うとするよ」

一例と共に、一斉に化け式達が飛び出した。獣に鳥に、人に蛙。落書きめいたシルエットの化け式達が、伊予の狸達の間を名残惜しそうに駆け抜ける。

「おやおや、お忙しいですこと」

「金長のところには使いをやっておくよ。近々必ず顔を出す」
「ええ、ええ。それがよろしいでしょうよウ。……どうぞご無事で、二ツ岩殿王様」

ひらひらと手を振るお袖狸に、マミゾウはしつかりと頷き、どろんと身を翻して帽子に襟巻の大妖怪の装いも新たに空へと飛び上がった。

もはや遠慮などしてられない。宙に身を翻して全身に力を漲らせ、化け式をさらに一羽の鳳へと変じた。五丈ほどもある

翼をはためかせる猛禽の背に乗り、夜空へと舞い上がる。

遙か眼下、瀬戸内の荒波を見降ろして、一路、北へ――

「やれやれ――どこのどいつじや、寄りにもよって儂の社殿に手を出すとはの」

二ツ岩大明神お籠り堂に詰めるような者達は、そろって敬虔な信者である。まかり間違っても不審火を出すような不心得者ではないはずだった。仮にそうだったとしても、留守を頼んだ禅達以下の四天王がへまをやらかすとは思えない。

胸騒ぎと共に、どこか昂る自分を感じながら――マミゾウは佐渡へと急ぐのだった。

――やて。

かくして佐渡は相川、二ツ岩大明神への旅路へと向かったマミゾウは、その最中に思わぬ相手との再会を果たすことになる。

二ツ岩貉の一年と半年ぶりの帰郷は、佐渡の狸社会を揺るがす大騒動となるのだが――それについて語るのはまた、別の機会としてよう。



【あとがき】

はじめまして、あるいはお久しぶりです。
折葉坂三番地の銅折葉と申します。

このたびはお手に取っていただきありがとうございます。

この本、『二ツ岩貉化逆門』は、佐渡の二ツ岩狸ことマミゾウさんが平成のぼんぼり狸合戦のことを思い出したり、かつての縁をたどって四国の名狸達を尋ねたりする双六^{バツクギヤモン}めいた旅を描く、当サークル5冊目のオフセット本にして三十一冊目のSS本となります。

マミゾウさん好きが高じて、気付けば狸沼に首までどっぷり。ついには四国に聖地巡礼(?)旅行に行くまでになりました。平成狸合戦ではあつさり死んでる事になってる佐渡の団三郎狸ですが、あれがもしマミゾウさんだったら、ただ死んでるなんてことはあるまいという強い思いが、この本の原動力となりました。少しでも楽しんでいただけましたら幸いです。

今回の表紙はエンクロ様に描いて頂きました。外の世界を悠々と旅する素敵な佐渡の二ツ岩大明神と、彼女に負けず劣らずの狸達の騒がしさが伝わってきます。どうも本当にありがとうございます。また、でね様には佐渡のあれこれについて色々相談に乗って頂きました。

いつもながら内容についての相談、装丁等について白身氏、Riza氏には様々な形でお世話になっています。この場を借りてお礼をさせていただきます。

——それでは。
また次の機会にお会いできることを願って。

【奥付】

フタツイワムジナバケギヤモン
「二ツ岩貉化逆門」 第2版

平成26年10月12日

東方紅楼夢(第10回)

オルハザカサンバンチ
発行 折葉坂三番地

(<http://oru hazaka.dojin.com/infoblog/>)

著者 銅 折葉

印刷所:(株)ポプルス

※本作は「上海アリス幻楽団」様の
「東方 project」の二次創作です。



ふりだし

Xanadu

Kyoto

Yashima

Dougo

Kutani

Matsuyama

Sado

